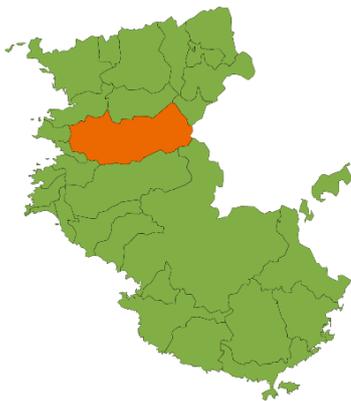


和歌山県有田郡有田川町

学生との協働による棚田保全・集落支援活動

(申請タイプ)



【地域の基礎データ】

人口：25,080 人（令和 3 年 10 月 1 日現在）

高齢化率：31.9%（令和 3 年 1 月 1 日現在）

産業：農業（みかん、山椒、花き）、林業 など

【活動の基本情報】

参加学生数：32 名（1 回生：8 名、2 回生：6 名、
3 回生：10 名、4 回生：8 名）

活動期間：平成 23 年 7 月～

担当教員：大浦由美

1. 活動実施の経緯

有田川町での第 19 回全国棚田（千枚田）サミット（2013 年度）開催決定をきっかけに、2010 年に県が企画した「棚田モニターツアー」に当時の観光学部生約 20 名が参加した。地域の農業者の高齢化とともに耕作放棄地が増加する当地の現状を目の当たりにして、学生側から「棚田保全ボランティア」のアイデアが出されたことをきっかけに、学内で棚田保全ボランティアへの参加者を募り、「棚田ふぁむ」を結成。2011 年 7 月から活動を開始した。



2. 活動の内容

今年度もコロナ禍の影響を受け、現地活動は「山椒収穫支援」と「稲刈り」の 2 回となった。その他の活動は以下の通りである。

- ・ 定期的なミーティングの開催：学生リーダーを中心として定期的に全体ミーティングを実施し、活動に関する意見交換や議論の他、棚田に関するミニ学習会を開催した。
- ・ メンバー紹介および活動報告誌の作成
- ・ 活動に関するワークショップの開催：コロナ禍が 2 年に及ぶなかで、現地にほとんど行くことができず、学生にとって活動の意義を見出し難い日々が続いた。そこで、活動開始時から現在までの活動を振り返り、今後の活動の方向性を考えるワークショップを開催した。

3. 活動を通じて

コロナ禍が長期化するなかで、これまでの活動形態の見直しを余儀なくされている。現地関係者および行政との議論を重ね、地域にとってよりよい活動を共に模索していきたい。

4. 成果物（ポスター）



棚田ふあむの結成

全国棚田サミット開催に向けて、和歌山県が平成22年に開催した棚田モニターツアーに参加、耕作放棄地が増加する棚田の現状を目の当たりにする。和歌山県と有田川町からの棚田保全活動の提案によって学内で参加者を募り、棚田ふあむ結成。

平成23年度から有田川町沼地区で活動を開始。現在まで10年間活動。当初は棚田の保全を目的に活動していたが、現在は棚田と棚田を保全する地域の人を支える活動をしている。



有田川町沼地区

和歌山県中央部に位置し、「日本の棚田百選」に選定された「あらぎ島」をはじめとして、多くの棚田が点在しています。急傾斜地の棚田が美しく、近年では「ぶどう山椒」の栽培も盛んです。ただ、高齢化が進み、沼地区の人口割合はほとんどは高齢の方が占めています。

そのため、棚田やぶどう山椒もいまはその方たちが栽培可能でも、後継問題や自分たちで栽培ができるかという問題が深刻です。



活動内容



新メンバーとの顔合わせ

6月



山椒収穫支援活動

7月



稲刈り・草刈り

10月



ワークショップ

12月

コロナウイルスの流行により、新メンバーを加えての初めての活動はオンラインでした。今年度は、週に1度の定期ミーティングなどは対面・オンラインどちらでも参加可能なハイブリッド形式で行いました。

今年度初めての対面活動ができました。活動の際にはマスクの着用やソーシャルディスタンス、アルコール消毒など制限はたくさんありましたが、その中でも地域の方との交流を楽しむことができました。

今年度2度目で最後の対面活動でした。久しぶりの活動を楽しむことが出来ました！また、この日は沼地区周辺の絶景スポットにも行ってきました。自然豊かで、オススメです！！

この2年間は思うように活動が出来ておらず、もどかしい気持ちでいっぱいでした。私たちLIPのあるべき姿や今後の目標などを改めて考えるためにワークショップを開催しました。思う存分活動できる日が早く訪れることを願うばかりです。

今年度の総評

- ・ 稲刈りや草刈りは大変だけどとても達成感がありました。
- ・ 農業で機械化が進んでいるとはいえ、どの農作業も力や体力が必要だったので、少しでも軽減できる工夫や、若者が必要だと改めて思いました。
- ・ 日本の食料自給率の低下問題の現実を体感しました。
- ・ 地域の人と色々な話をして交流することができて嬉しかったです。